



六
花
10

俳句雑誌りつか
2018（平成30年）
cover design ichigo

道

秋日のしぶき

山田六甲

根の国に石見の国に花檜
鴨山に人麻呂逝くと昼の虫
足音を聞きしと虫の闇の宿
水牢や紅黒の鯉水澄んで
亀山といふは鴨山萩密に
印南を淡路を望み昼の虫
いうれい茸うなじにもの気配あり
二神の契りにかたき椿の実
虫暮るる雌岡山を下りけり
青鷺の振り向きもせぬ船出かな
言霊の吹つ飛んでゆく秋の航
甲板に秋日の飛沫あふれしむ

洞穴は黄泉へ二つの秋の声
いわし雲出船入船鳥の暮るる
もくづ蟹汐入川につるみけり
人麻呂の野島の崎を秋の汐
面舵や舞子の浜へ秋落暉
秋落暉播磨灘より潮もどり汐
指先にあをまつ虫を鳴かすとは
たでの花人に遅れて歩きけり
月待ちの浦にしほかぜ診療所
蔓たぐる島の浦曲の寺男
国生みの長子は蛭子秋蚊打つ

偶然、立ち寄った島根県三郷町三瓶山ふもとの鴻抱（ゆがかえ）温泉近くに「茂吉記念館」が場進いのようにあって、「柿本人麻呂終焉の地はここである」と茂吉が七度も通って特定した。それがいわゆる「鴨島」で、鴨島説は様々な学者が否定しているが、歌人独特の嗅覚と实地踏破でここだと確信したのでろう。柿本朝臣人麿の死（みまか）りし時に、妻の依羅娘子の作れる歌、「今日今日とわが待つ君は石川の貝（かひ）に交りてありといはずやも」万葉卷二（二三四）。この歌は柿本朝臣人麿が石見国で亡くなったときに依羅娘子が詠んだとされる一首の挽歌のうちのひとつ。依羅娘子（よさみのをとめ・いらつめ）は石見国での柿本人麿の現地妻とされる女性。貝は山峡の峽とも。貝を根拠に梅原猛は『水底の歌』で海の底であると強く否定して、梅原の説を証明しようと浜田の沖で海底調査したが、痕跡がなかった。話をもちですが、茂吉記念館の碑に「人麻がついのいのちをはりたる鴨山をしも此処と定めむ」と刻む。依羅娘子が人麿の死を知って、今日か今日かと私が帰りを待っている貴方は、石川の貝に交じって倒れているというではありませんかと問いかけているのだ。また行く。

めだか飼ふ景德鎮の手水鉢
苔匂ふ弘法岩の滴れり
重なれる日傘越しなる神事かな
梅雨晴間千手観音指ひらき
日暮には守宮来てをり仁王門
山蟻の日なたに出でて惑ひをり
青しぐれ踵冷えてきたりけり
夏萩のきのふの雨をこぼしけり
湯上りの吾子の呼ぶ声星涼し
昭和より平成の夜の明易し

高華抄

甚平

佐津のぼる

むらさきにけぶる雨もや花檮
音高き雨過ぎゆけり花石榴
突堤に音のあがれる土用波
地下道に光れる梅雨の傘しづく
前向きに生くるほかなしかたつむり
母の忌の煮物のにほふ植田寒
すでに実をつけ店先のトマト苗
音たてて猫の水飲む朝曇
採血に日焼けの腕を差し出せる
甚平着ていよいよおじんらしくなる

炎昼にからす飛び立つかきごほり 菊谷 潔

えんてんにからすとびたつかきごほり きくたにきよし

七夕に願ふ事なき欲ふかさ

緑蔭に集ふ藪蚊を同士討ち

背骨までぐんにやりとする暑さかな

炎昼の汗といふ汗かきごほり

炎昼にからす飛び立つかきごほり

直感的にこの句は永田耕衣の世界だと思つた。通常取り合わせの句を私は評価しない。その理由は、取り合わせは句を忘れやすいから、という理由による。だがこの句は実景が目に焼き付く。言葉が焼き付くのだ。鴉の色は黒く、縁起が悪いと人は忌み嫌うし、黒い色そのものが炎天下に暑苦しい。というより息苦しい。しかし、何か言葉で鑑賞しにくい、その俳味を実感はできる。まさに菊谷潔の世界がここにある。

香水にこころ粟立つ夕べかな 善野 行

こころすいにこころあわだつゆうべかな ぜんのこう

香水にこころ粟立つ夕べかな

常ならぬ夜の香水となりにけり

香水の爪美しきひととあり

風鈴に気うつ足を止めにつけり

緑蔭に入りたりげな六地蔵

「こころ」や感情・比喩・形容・副詞で句を補うのは好きでないが、行は不思議な使い方をする。中岡毅雄さんが「きずな」創刊号の「俳句時評」で挙げた万太郎の句、「ゆふやみのわきくる羽子をつきつづけ」というのと通ったところがある。こころと血は同期しており、血が湧きたつことも含まれている。人の中の、ある感情が揺さぶられて、液状化加速現象を起こしたにちがいない。香水は男の大地を揺さぶるのである。

雪卿集 せつけいしゅう

志方 章子

永田万年青

若楓うちかさなりて日の差さず

瓜の花どれも同じに見えにけり

雪の下増えきて庭の庭らしく

枇杷青し藪と化したる空き地かな

旨さうにみえ旨くなし桜の実

草蓐汚れし手にて渡さるる

波乗りや白兎の海をすーいすい

喘ぎつつ中腹に来て若葉風

主無き蜘蛛の巣の透けみたりけり

繊細に密に蜘蛛の巣張りにけり

すいれんの中程に亀動かざる

片蔭に入りきれない頭かな

噴水の先のきらきら空にあり

樹の蟻の暫し止まり別れをり

お前もか艶の失せたる夏柳

ゆるやかにポート進める二人かな

藤生不二男

白鷺の啞へし魚の反りにけり

回廊のかど曲りけり夏木立

新任の教師飲み干す麦茶かな

姫女苑まこと見慣れし花なれど

夕映えの貌おそろしき金魚かな

空蟬のめざすものある途中かな

つなぎたる手を解かるる茅の輪かな

此処がなぜ曲つてゐたる蟻の列

升田ヤス子

わが齡ねぢ花の秀のこのあたり

水の裏めだかくすぐる昼下がり

浴衣帯値をきけば良く締まりさう

秋出水うつたへてゐる牛乳屋

首出して亀が息吐く大暑かな

おしやべりや玻璃を隔てて作り滝

下屋敷跡にいただき穴子丼

雀瓜育つミストを吾も浴ぶ

出口 誠

手洗ひの水が湯になる真夏かな

目に入り汗が涙となりて落つ

地下道を出れば並木の蟬時雨

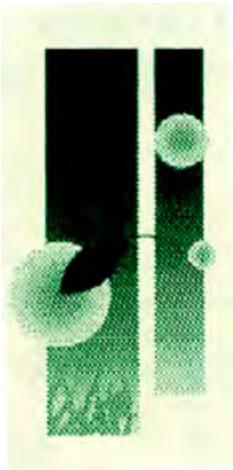
地下街の浴衣の帯の緑色

冷房を出れば灼熱地獄かな

天然のサウナ風呂なり夏の午後

少しだけましとなりける夜の秋

この風を待っていたんだ夜の秋



雪樹集

谷口 一献

盆花に大吟醸で父迎ふ

地藏盆知る顔の皆揃ひけり

トイレットペーパーの端探す処暑

纏れ合ひ蜻蛉上手に情交わし

何故山の日のできしやと独り酒

百薬の長で夏風邪癒へにけり

田尻 勝子

虫の音の畳の角より上りけり

ひだる神憑き来る終戦記念の日

恋を恋ふ神現れぬまま七夕に

雲しげく行き交ふ秋の来たりけり

秋立ちぬ笙筆策と銅鐸の音と

横移動してまた蝉の鳴き直す

住田千代子

水底に夏の落葉の赤くあり

萍を吹き寄せて風止みにけり

麦茶飲む引越しの荷に囲まれて

ソーダ水昔の色のままにあり

片蔭に上衣一枚脱ぎにけり

炎天の杖の短く影のあり

平居 滯子

玫瑰を垣根としたる住居あり

けもの道交差してをり登山道

山道のまんまん中に蛇交尾

この古墳我の住処と親鴉

橡咲くや墓地の隣の温泉場

亡き夫と岩尾根をゆく熱帯夜

赤松有馬守破天龍正義

延川五十昭

烏賊釣り灯神話の国の沖にあり

平成の御世の終ひの蟬時雨

桜桃や回復少し早くなりさうぞ

梅雨嵐平成の世を思ひけり

今年また枇杷盗人となりにけり

初孫は平成生れ立葵

つるつるの袖で李をみがきあふ

白シャツに揚梅の汁こぼしけり

母の手で剥いてもらひし夏蜜柑

喫茶店冷し西瓜の暖簾出す

目隠しをずらせ西瓜を割りにけり

車からころげ落ちさうなる西瓜

廣畑育子

酷暑かな山の緑のまぶしかり

なまぬるき台風の風髪乱す

台風禍赤き河口の盛り上がる

素麺をすすり愚痴など言ひ合へり

ハヤシライスかるく平らげ生身魂

気持ち良く撫でられてゐる箒草



六^り花^か集^し
集^り



十月到着順

善野 行

香水にこころ粟立つ夕べかな
常ならぬ夜の香水となりけり
香水の爪美しきひととあり
風鈴に気うつ足を止めけり
緑蔭に入りたりげな六地藏

江見 巖

羽抜鶏威厳正しき姿なり
庵治石を真つ二つに切る時鳥
親の部屋素通りしたる吊忍
幼子の持つて来たるや落し文
父の日や目高の沈む鉢のあり



鴨立つ沢
10月作品から

森山あつ子

麦秋や近江路抜ける新幹線

麦秋は麦の熟れるころ。その

麦畑の広大な近江地方を新幹線
で通り過ぎる。いかに近江が広
大でもあつという間の麦畑で終
わる。あつ子は麦の生産地印南
出身だから、麦畑には思いも一
入なのだろう。

小林はじめ

誰がためのもじずりぐさよあや
しけれ

文字ずり草とは振花のこと。
ネジバナが、花茎にラセン形に
よじれて付く様子を、身をよじ
るほどの恋心にとえた歌にも
詠まれている。昔、陸奥の国、
信夫郡（現在の福島市内）の特
産であった。絹布に振れるよう
に染色した織物「信夫毛地摺」
（しのふもちずり）を指し、植
物の色素を布に摺りつけて振れ
たような模様をつけた織物、草
木染。というのをふまえた句。

延川笠子

ミニトマト育てて孫に届けけり

記念すべきミニトマトの初成
りを初めて生まれた孫に届けた
のだ。孫のためなら丹念に育て
たのであろう。愛の結晶を愛の
結晶に届けるわくわく感が伝
わってくる。笹子は本当は川柳
が好きなのだけれど、孫を川柳
で詠むわけにいかないのがつら
いと思う。次月にはワンコイン
に川柳コーナーを作ると万年青
監督赤松コーチ、田尻スカウト
は考えている。あなたの出番で
すよ。